1998.3.9
第105号

編集・発行
福島県教育庁
会津教育事務所
加藤征男

編集協力
北会津・耶麻・両沼
地教委連絡協議会
小・中学校長会

山々に学ぶ

福島県教育委員会委員長　二瓶義春

私は山歩きが好きだ。昔読んだ本の中に西丸震哉の「山の博物誌」がある。『山をただ足で歩くだけでは人間より犬のほうが上手だ。山に入ることで広い分野に目が開かれ、これからの人生にプラスにしないと山歩きの価値はない。日本人は本の上での知識は持っているが、実物で身につける良い教育を受けないので、一種のカタワだ。これを正常に戻さないでは、科学の進歩も子弟の教育もあったものではない。人間は山歩きをして、本物の自然物からいろいろの事を学び、楽しみと喜びを見つけることだ。』と言っている。私はこの教えを山歩きの原点にしてきた。この西丸氏の提言は三十年前のものだが、心の教育がさけばれている現在にもピタリと当てはまることだと思っている。

六年前に県教育委員になってからは、高校山岳部顧問であった先生や、喜多方の小荒井実先生と山行を共にするようになり、いろいろと教えていただいた。その中で私にとり最も大切なことは、ロマンの心と科学の目をもち続けるということであった。

今迄の私の山歩きは「あゝ綺麗、あゝ凄い」と専ら情緒的なもので、犬のオシッコ位であったし、科学の目からは程遠いものであった。幸いにも小荒井先生達の家来になったおかげで、花の名前の由来、花や樹の特性、ブナや雑木林の重要性、原生林の立ち枯れ、万年雪のこと、動物の生態、山や部落の歴史など多くのことを学んだし、現場につれて行ってもらうことも度々であった。将に〝生き生き体験学習〟である。これらの先生方のご指導は老齢の私にも効果覿面、私の山歩きの価値観は大きく変わったし、人間性も取り戻し、毎日の生活も充実したものになったことを喜んでいる。今で言う〝心の教育〟の成果だと感謝している。

また、私の山歩きの心がけの一つとしている〝登山は何人かで行くこと〟を厳守し、山を歩く人と人との間に信頼や助けあいや友情やロマンが生まれ、頂上での喜びが何倍にもなることを願っている。

一月になって思いがけない大雪が降ったが、春の足音が聞こえている。今年もまた山に入って本物の教材で、本物の勉強をしたいものだ。孫たちもまた連れて行きたいと思っている。山々は私の教師であり、森は心のふるさとである。先生方もどうぞ山歩きをやってみてください。子供に喜びと楽しみを与えてください。頑張りましょう

受賞おめでとうございます

（敬称省略）

○文部大臣表彰
・中学校教育功労者
会津若松市教育委員会教育長　宗像　精
元会津若松市立第一中学校長　川島　郁郎
・優良PTA
北会津村立川南小学校父母と教師の会
・社会体育優良団体
会津陸上競技協会
・学校保健関係功労者
会津若松市立神指小学校等学校医　山室　重遠
高郷村立高郷第一小学校等学校歯科医　二瓶　博利
・学校安全関係優良団体
河東町立河東第三小学校
・学校給食優良学校等
熱塩加納村立加納小学校
元会津本郷町学校給食センター主任調理員　山田カツ子
・学校基本調査
学校法人みなみ若葉幼稚園

○県教育委員会表彰
・学校教育功労者
会津若松市立謹教小学校長　横山　敏明
会津若松市立第二中学校長　齋藤　健
・社会教育功労者
元北会津村公民館長　川崎　利夫
・社会教育関係功績顕著な施設・団体
昭和村公民館
・へき地教育関係功績顕著な団体
山都町立山都第三小学校
・芸術・文化財保護功労者
元伊佐須美神社太々神楽保存会長　真部　俊伍
・保健体育功労者
会津若松市立城西小学校・第四中学校学校医　石田　恒雄
・福島陸上競技協会副会長・会津陸上競技協会会長　酒井　幸喜
・保健体育関係功績顕著な団体
会津若松市立東山小学校
・福島県教職員研究論文特選
会津若松市立城西小学校教諭　佐藤　寅記
・学校安全優良校
会津若松市立行仁小学校
・特別功績者
会津若松市立第三中学校合唱部
・第41回よい歯の学校コンクール
特別栄誉賞
会津若松市立赤井小学校
高郷村立高郷第一小学校
優良校
喜多方市立第一小学校
喜多方市立豊川小学校
高郷村立高郷第二小学校
会津高田町立永井野小学校
三島町立三島小学校

○学校給食会表彰
・学校給食優良団体
会津高田町立尾岐小学校
・個人表彰
会津若松市立第五中学校長　長原　康之
会津若松市立日新小学校主任労務主査　石川チイ子
会津若松市立謹教小学校主任労務主査　宗像　英子
会津坂下町立学校給食センター主任調理員兼主任　竹村　幸子

○学校林活動・環境緑化コンクール
・前橋営林局長賞
会津若松市立大戸小学校
・県総合緑化センター理事長賞
高郷村立高郷第二小学校

特色ある学校紹介

木と心を育てる

西会津町立野沢小学校

西会津町立野沢小学校は、耶麻郡の西部に位置し、万年雪をいただく飯豊連峰を遠くに望み、近くには阿賀川が悠々と流れている。

本校では、昭和六十年と平成五年に学校林の土地契約を行い、緑の少年団活動の一環として杉立てや下草刈りを行っている。その実績が認められ何度も表彰を受けている。

少年団の活動は毎年四月から始まる。学校の裏に杉の木の民有林があり、その中で六年生を中心にシイタケ栽培を実施している。手をかけたシイタケは形も味も格別である。

学校林は二ヶ所あるので、六年と五年とで手分けして下草刈りを行っている。鎌を使う作業はほとんど経験がないので、PTAの方々の協力を得て行う。仕事が終わり、学校林の中をさわやかな風が吹きぬけるようになると、児童は自分たちの仕事のすばらしさを実感するようになる。

本校を取り巻く自然環境はすばらしいものがある。しかしそれを有効に活用してこそ教育環境と成り得るのである。「木を育てながら心を育てる」ことをモットーにして、これからも学校林活動を充実させていきたい。

随想

校庭に会津在来種の生物を

福島県五色沼自然教室嘱託自然観察指導員　冨田國男

一九六〇年頃までの会津の里には、豊かな自然の生命の輝きが溢れていました。子供たちは、かような自然の中で、遊びながら育ちました。子供はいつの時代でも自然にふれ、自然のなかで育つ方が、間違いのない育ち方ではないでしょうか。

現在の会津の里の自然は、極めて劣化した自然です（水田の一種の緑に感わされがち）。かような現状では、子供たちは本当の自然らしい恩恵にふれる機会が減り、興味も感動も半減し、生命への思いやりも体験できなくなり、『感性の劣化』も懸念されます。校内暴力や陰湿ないじめなど、狭い心にしたのも、自然の中での遊びがなくなった事が、一因と思われます。

今こそ豊かな自然の回復が急務です。その一環として、校庭に会津の在来種を育てたい。自然の仕組みを学ぶため、移植や植え樹でなく種や実を播いて。クリやドングリのミニ雑木林、桃、柿、林檎の木…。飯豊タンポポ、自生の桜なども小さな池や川とともに。自然植生を感わす園芸種は控えめにしましょう。

中・高連携の実践について

高等学校教育課（会津教育事務所駐在）指導主事　吉川　正

児童・生徒の多様化とともに、「非行の低年齢化」「学校生活不適応」「不登校」など、危機感を覚える言葉が氾濫しております。このような中、平成九年五月、生徒の個性を生かした進路希望実現のための学力の向上、中学校・高等学校間の学習指導の一貫性の確立を目論に、「中・高連携学習指導研究委員会」が発足いたしました。本県県立学校においては、すでに本年四月より「学力向上サクセスプラン」事業が開始され、学習の個別化と、生徒の実態に応じた効果的な学習指導法の確立をめざした総合的な取り組みが進められております。この研究委員会もその取り組みの中で組織されました。

委員会は、国語・数学・英語三教科について中・高各七名の委員により構成され、中学・高校連携による教科別研究会議開催による学習指導法の研究と「つなぎ教材」の開発、他県先進校の共同視察研修が実施されました。すでに三回の研究委員会が実施され、その趣旨徹底を図るとともに授業参観および授業研究を通し、中学・高校間の相互理解と実態把握・授業実施上の課題発見とその解決に向け大きな成果があげられております。

これまでも、中高連携の必要性については多くの場で論じられて参りましたが、実践活動面ではまだまだ垣根を除けない状態にありました。今回の取り組みの中で、相互の授業参観の実施、授業実施に当たっての課題および効果的な指導法について、中学・高校の垣根を取り払い、本音で意見交換ができたこと、また現場の教員の手で「つなぎ教材」を作成したことは大きな意義があったと思います。本年度は、わずか三回の協議会でありましたが、この交流を通して得た成果および課題は、次年度以降の活動の中で生かされるものと確信いたします。

若松女子高等学校、若松第一中学校・一箕中学校のご協力をいただき、それぞれの学校での授業参観が行われました。教室には生き生きと授業に取り組む生徒諸君の姿がありました。生徒の目を輝かせるのは、教師の意欲と生徒理解への努力にかかっております。委員会の実践的取組が、各校への確かな波紋の広がりとなることを願っています。

私の実践

実感と納得を伴った理解をめざす社会科の授業実践
～「知っている」から「わかっている」へ～

会津若松市立第二中学校　藤田信一

一人一人の既有の知識は様々である。また、教師が授業において共通な知識・理解の習得を意図しても、一人一人の生徒においては、様々なレベルで理解が成立している。そこで、教師が共通な知識を与えようとするのではなく、あくまでも個々の生徒が自らの手で実感と納得を伴いながら知識を獲得し、社会認識を深められるような授業を実践したいと考えた。

例えば、単元を通した課題を設定し、それを追究していく授業の場合、次のように展開した。

① 既有の知識をもとに自分の考えをもつ。
② お互いの考えを交流し合い、検討する。
③ 自分なりの視点をもとに調べ学習を行い、考えを深める。
④ お互いの学習を交流し合い、検討する。
⑤ 新たな認識を獲得する。

こうした課題解決的な授業により、「なるほど」と楽しみながら学習する生徒が増えるとともに、「知っている」から「わかっている」へと認識の深まりが見られた。具体的にはレポートの作成や話し合いなどを通して、社会的事象を主体的に考え、自分の言葉で表現できるようになった。また、交流の機会を多くすることで見方、考え方の幅を広げることができるようになった。更に、課題解決的な学習方法を身に付けるとともに、具体的な知識の習得でも成果をあげることができた。

今後も生徒の思考の流れに寄り添い、実感と納得を伴いながら知識を獲得し、社会認識を深められるような授業を実践していきたい。

心に残る人々

高郷村教育委員会教育長　成田辰平

人生八十年というのは、時間にすると七十万時間の人生である。このうち、実際の労働時間は八万時間というから、生きている長さに比べると、そうは多くないようにも思われる。

村職員として勤めてから、四十年が過ぎ、一般行政職から百八十度の方向変換ともいうべき、全く経験の無かった教育行政の立場となったとき、先輩、同僚そして中学校時代の友人から力強い激励の言葉をいただき、これからまだまだやらなければ、と元気付けられた。と同時に、心に残る多くの方々とめぐり会えた喜びを噛みしめ感謝している。

しかし、その中には、私が最も信頼し、お世話になった大先輩はいなかった。二年前に、退職されてから僅か二年半で他界してしまったのである。

大先輩との出会いは、役場職員として初めて勤めた時からである。直接の上司として指導を受け、住民課時代は課長であった。公務は勿論、世間の教訓、そして家庭、住宅建設、保証人等すべてにおいてお願いし、特別なお世話になった。

また、私の総務課時代には助役として勤められていた。そこを最後に退職されたのである。第一次行革時代に歳出の削減等、今より厳しかったとき、村財政の健全化と村政の伸展に精励され、職員にはいつも公平、公正で個々の指導にあたり、心をひきつけるものがあった。

出会いから三十八年間、折にふれて世間、人間、行政を教えてくれた大先輩は、私にとってかけがえのない忘れ得ぬ恩師である。

私の作品

雪かたし

会津若松市立大戸小学校　三年　芳賀成美

朝日がさめたら
ピュー、ピューと
雪がよこにふっている。
お母さんが雪をかたしている。
こしをまげて、寒そうに
雪をかたしている。
「お母さんは、やっぱりお母さんなんだ。」
心の中でそう思った。
ギュッ、ギュッ、ギュッ、
お母さんが作ってくれた道を
ありがとうの気持ちをこめて
ゆっくり歩いた。

会津若松市立第三中学校　三年　高久裕介

この作品は三年生選択美術で製作したイラストレーション」です。情報に溢れる現代で、タレントを自分の手と筆によって表現するというのは生徒たちにとって面白くさい部分があるようです。しかしこの作品を製作した生徒は単色にこだわり一気にかきあげることができました。

会津の冬

会津坂下町立第一中学校　二年　稲垣俊

冷たく凍んだ空に深く轍が刻まれた雪道。トタン屋根の民家と石碑。冷たい色調ではあるが、そこに巧みに「人の温もり」を盛り込み、すがすがしさと暖かみを感じさせる。構図としては道路をうまく使い、自然な奥行き感を出すことに成功している。まさに会津の冬の風景の典型のような作品である。

私の抱負

初心

北塩原村立裏磐梯中学校
教諭　石井徹弥

生徒たちの前に立つ時、彼らのとろんとした目つきやあくびほど、怖いものはない。

語りは教師の重要な職業技術の一つと言われるが、元来私は話が拙い。その内容で生徒の目を輝かせるような、生活実感の込もった人間味の濃い話というのが実に苦手で、その度、人間としての経験の浅さを痛感する。

教職についてはや一年が経とうとしているが、一年前のあの清新にして意欲に満ちた気持ちは、決して忘れたくない。しかしまた、学校外への視野も拡げることで、人間的な魅力を備えた教師を目指したい。より多くの、生徒の目の輝きに出会うために…。

和やかに心を合わせて

柳津町立柳津中学校
教諭　荒川徳子

「うちの学校は一人で悩まない。組織で協力し解決することを大事にしています。」赴任の日、校長先生からお話いただいたことでした。

生徒達は、繊細に先生方の雰囲気を感じ取ります。

和やかで、安定した心は適切な判断や思いやりを生みます。その雰囲気作りが教頭の大きな仕事であると思っています。「ノブがとれた」「どれ、どこ?」すぐ跳んで行く先生。「明日、餅米もってくる」と校長先生の声。「とれた大根、小豆あるよ」地元の先生。用務員さんと養護の先生の協同厨房。つきたての餅を笑顔で食べ、諸指導に先生方は、また出ていきます。

四季が育む

会津若松市立原小学校
校長　玉川邦夫

"湊の冬は湊の人を造る"この言葉は、地元の長谷川偉熊先生が寄贈されたレリーフ作品のテーマである。先生をお尋ねして、地域に根差した教育のあり方が見えてきた。

地域にあるすばらしい教育力を掘り起こし、住民の学校に寄せる期待に近づけるため、さっそく先生方のフレッシュな感覚を取り入れた。地域の方々の生き方を学び、湊の四季に積極的に働きかける教育活動を展開していく中で、たくましい湊の子供が、今育ちつつある。

山は遠くで…

会津教育事務所学校アドバイザー
山本佑一郎

少年の非行が極めて深刻な状況を示している現状では、形から離れ、心についての対応が求められてきている。

しかし、ダイヤルSOSで相談を受ける限りでは、一つの現象のみを追求するものが圧倒的に多く、心情・心境までには目が注がれていない。子供が何を考え、何を訴えているのか。そのためには、子供たちの本当の姿をどう見るかにあるのだが…。

山はある程度の距離をおいてこそ、全容を見ることができる。その点、近いところでしか子どもを見ない、または見えない教師や親が意外と多いことに驚かされている。朝の光が山にどのような影を落としていくか。山の色にどう染められていくかを見ることである。いつも近くで見ている。それを絶対的と思う教師や親がいることを憂う昨今である。

子供の変化に対応する生徒指導

子供理解とキレる子への対応

毎日のようにテレビや新聞で報道される「刃物による少年犯罪」のニュースに接するたびに、いつ身近に同じような事件が起こるか知れない不安と特効薬を見出せないいらだちをおぼえる。

私達は、常にこのような状況が自分の学級・学校で起こるかもしれないという危機感をもって子供に接していかなければならない。

そのためには、事件のたびに聞かされる「普通の子供」というような大ざっぱな捉え方を改めることである。一つのラベルでその人を言い表すことなどできるはずがなく、優しいかと思えば、時には異常なまでに残酷であったりする。それは一人一人の中で状況によって現れたり、隠れていたりする。また、成長過程によっても常に変化する。だから、「普通の子供」などという子供はいないのである。

以下に、子供理解の一例を示してみたい。

一　先ず、この子供との初めての出会いの印象をラベルに書いてその子供像に貼る。（「ラベルに書いて貼る」というのはイメージ的に表したものであり、現実的には学級経営誌などにメモ書きすることである。）

二　また何日か過ぎて感じたことをラベルに書いて貼る。

三　今までのラベルに書いてなかったような行動をした時に次々と書きたす。

このようにしていくと、その子供を表す一面が次々と加えられ、実像に少しずつ迫ることができる。特に、カッとなると見境がつかなくなると思われる子供については、

○　全職員にその子供の状況を説明し、理解ある対応をしてもらう。

○　保護者と常に情報を交換し合い、子供の情報に応じた接し方をする。

○　場合によっては、保護者の同意を得て、カウンセラー・精神科の医師・児童相談所・家庭裁判所・警察などの指導・援助を要請する。

今後、学校とPTA・地域社会が、「子供の健全育成」を最重要課題にして、真剣かつ早急に同じテーブルについて話し合わなければならない。